女性医師支援センター便り

第12回女性医師支援セミナーの報告

宮城県医師会常任理事
宮城県女性医師支援センター委員
福　與　なおみ

10月27日（土）に宮城県医師会館で，「広がれ！イクボスの輪」というテーマで第12回女性医師支援セミナーが開催されました。本セミナーでのメインイベントはイクボス大賞の表彰式です。

佐藤和宏会長の挨拶に始まり，髙橋克子宮城県女性医師支援センター長から今年度のイクボス大賞（団体）である医療法人金上仁友会金上病院が表彰されました。引き続き安藤由紀子先生の司会のもと，イクボス大賞特別賞（個人）として受賞された仙台市立病院副院長・小児科部長の大浦敏博先生，仙台市立病院産婦人科部長の大槻健郎先生，宮城厚生協会坂総合病院診療部長の舩山由有子先生の３人の先生が紹介されました。出席されていた大浦先生と舩山先生が表彰された後に，受賞講演となりました。

NO PHOTO

安藤正夫先生と髙橋センター長

NO PHOTO

舩山由有子先生

NO PHOTO

大槻健郎先生と大浦敏博先生

イクボス大賞を受賞された金上病院院長の安藤正夫先生のご講演では，子育ては社会全体で担うべきという安藤先生の信念を，会場の皆が強く感じることができました。例えば，介護老人施設と病院の中間地に設置されている院内保育所や，職員のこどもを対象とした夏休みの「こども参観」などのイベントの企画には，安藤先生の深い配慮と工夫が施されていました。ですので，３世代にわたって金上病院で勤務する一族（！？）がいることも，非常に納得できました。

特別賞を受賞された大浦先生は，女性医師に特有のライフイベントに伴う人手不足から生じる部内の負担増大に対し，自ら奔走され医師確保にこぎつけたエピソードを話されました。さらに女性医師が順調に復帰しキャリアを中断することなく働き続けている様子が紹介されました。その背景には，専門性を活かしたチームワークを大浦先生が心掛けていることと，それぞれの医師自身のモチベーションの高さがあることがよくわかりました。坂病院の舩山先生は，仕事に対する積極的な姿勢を互いに支援しあい，同時に，男女問わず各々の家庭事情に臨機応変に対応しながら医療の質を保つことを意識した組織作りをなさっていました。会場のだれもがその秘訣を聴きたくなるような話でした。ご自身の経験から，こどもの成長や介護される人を大切にすることが，働く人のワークライフバランスを実現できるポイントである，という舩山先生のお考えは，とても印象的でした。

イクボス大賞受賞講演後には，シンポジウムとして株式会社藤崎の人事部人事キャリア担当チームマネージャーの小笠原順子さんからお話をいただきました。全く異なる職種ですが，医師と似ている状況もあると思いました。特に，出産後の復帰時の緩和勤務制度の施行後，離職ゼロ（復帰率100％）になった一方で，管理職に占める女性職員の割合は非常に低いという点です。離職という課題は解決できたものの，その後のキャリアをステップアップする本人のモチベーションの維持の方法が次の課題であるという点に，とても共感を抱きました。

NO PHOTO

小笠原順子氏

その後のディスカッションでは活発な意見交換がなされ，それぞれの立場や職場での「働き方」に対する課題があることが明らかとなりました。昨年度のイクボス大賞を受賞された仙台医療センター病院長でもある橋本省副会長の挨拶で，セミナーは閉会しました。

〈当日所用によりご欠席の大槻健郎先生からのコメント〉

今回はイクボス大賞・特別賞というとても光栄な賞をいただき本当に嬉しく思っております。

2016年日本産婦人科医会が行った調査によると対象となる全国の分娩取扱い病院における常勤女性医師数は2,037人であり全常勤医師4,862人中41.9％（８年前1,259人より11.3％増加）を占めています。その中で妊娠中または小学生以下を育児中の常勤女性医師は912人（44.8％）います。そのため妊娠・子育て中の女性医師がどのように勤務するのかが重要です。院内保育所を設置する施設は増加していて一定の支援体制は整いつつあります。しかし妊娠・子育て中の女性医師の家庭環境は各々異なるため個別の支援が必要です。仙台市立病院産婦人科では主治医制ではなくチーム制を取り入れ個人への負担軽減を図り，急な子供の発熱などには早退や休暇を取りやすくなっています。基本は平日日勤帯のみの勤務としていますが，家庭の支援状況に応じて朝夕の育児勤務緩和を行っています。可能であれば休日日直業務をお願いする場合もあります。個人ができる範囲での勤務を行うことにより男性医師，女性医師がお互いをサポートし，ともに働きやすい病院となるよう引き続き努力を重ねていきたいと思います。